

能狂言と私

能狂言と私

一度だけ、能をやってみようと思ったことがある。

大学二年の時、私は能狂言研究会の部員だった。研究会という名のおり実際には何もせず、時々公演を見るだけの活動内容だったが、大学祭に何かやらなくてはならない（たぶん補助金のために）ことになって、当時唯一の女性部員だった私に、仕舞をやれという命が下った。それまでに私はかなり長いことバレエをやったことがあり、当時は日本舞踊を習っていたから、仕舞はまったく未経験ではあったけれど、まあ同じダンス系、何とかなるのではないかと安

易に引き受けた。

ところが最初の稽古で、師匠たる人（一学年下の、確か有名な太鼓の御子息だった）の横に立ち、数歩動いた瞬間、これは付け焼き刃でできるものではないと悟った。言ってみれば武道の立ち会いで、向かい合って構えただけで、負けた！と思う、そんな感じである。別の言い方を借りるなら、ある高名な日本料理人がさる高級ホテルのレストランのコンソメの味を評して言った「ぶっ叩いても壊れない」という言葉そのものだった。

最初の挑戦で見事に挫折したが、負け惜しみで言わせてもらえば、かくも素早く無理と判断したところが、私の身体的見識の高さである。

そんなわけで実践では見事に敗退したものの、だからといって能に関する興味が失せたわけではなく、知的アンテナだけはあっちこっちと向けていた。

じつは大学時代、ギリシヤ悲劇研究会にも属していたが、こちらは能狂言研究会よりははるかに進んだ（？）活動をしていて、日比

能狂言と私

谷公園の野外劇場でギリシヤ悲劇を実際に上演するなどという無謀きわまる試みをしていた。何せこちらは久しく上演が途絶えた紀元前五世紀の演劇だから、何から何まで分らないづくめである。文献だけをたよりに、音楽やダンスまで、想像で作り上げる。

しかし社会的には注目されて、文学座の劇団員や社会人、研究者なども参加していたので、学生はむしろ端っこで小さくなっていた。それでも仮面も手作りし、裏方も学生が担当する。公演当日、私が照明器具を扱っていると、同級生が覗きに来て、「あなたが悲劇をやるのは喜劇だという説があるが、感想は？」と、からかった。

そんななかで、能とギリシヤ悲劇に思いがけない共通点を見つけたのも、私にはとても刺激的なことだった。たとえば、どちらも仮面劇で、役者は男性に限られ、その数がほぼ三人であること。合唱を（ギリシヤ悲劇の場合は舞踊も）引き受けるクロスと呼ばれる集団は、能の地謡によく似てはいないか？ ギリシヤ悲劇も能も、人間存在の深淵を哲学的に、というか慟哭するように、号泣するように表現するが、その一方で、ギリシヤ悲劇には喜劇が、また能には

狂言があつて、こちらは人間の生活に起こりがちな愚かしきや過ちを開放的に笑いのめす。そんな能と狂言、悲劇と喜劇は、どちらも同じ日に相前後して上演するのが仕来りである。

能や狂言の題材は源氏や平家などの古典が多いが、ヨーロッパの場合はギリシヤ悲劇が十七世紀のラシーヌなどに引き継がれ、二十世紀にいたるまで文学、演劇の源泉になりつづけている。たとえばエウリピデスの「ヒッポリュトス」からラシーヌの「フェードル」、そして映画「フェードラ（邦題『死んでもいい』）」という流れがあるのと同様に、能狂言も、歌舞伎や日本舞踊の『勧進帳』『末広がり』や、多くの道成寺物に翻案され、また三島由紀夫の近代能楽集を生み出している。そのように、長い時代を通じて命脈を保ち、また思いがけずも遠く離れた東西が呼応しあうのが、文化というものなのだろう。

そういうわけで、私にとって能狂言鑑賞とは、時空とジャンルを超えて思いをさまよわせる壮大な宇宙旅行のようなものだ。

それだけではなく、じつはまことに上質な仮眠タイムでもあるの

能狂言と私

だが。

(初出「月刊国立能楽堂」平成二十五年一月号)